

研究通信

№ 82

1972年9月刊
村落社会研究会
事務 局

—◇—
白梅学園短期大学
社会学研究室
(11研)内

第二〇回 村研大会開催ご案内

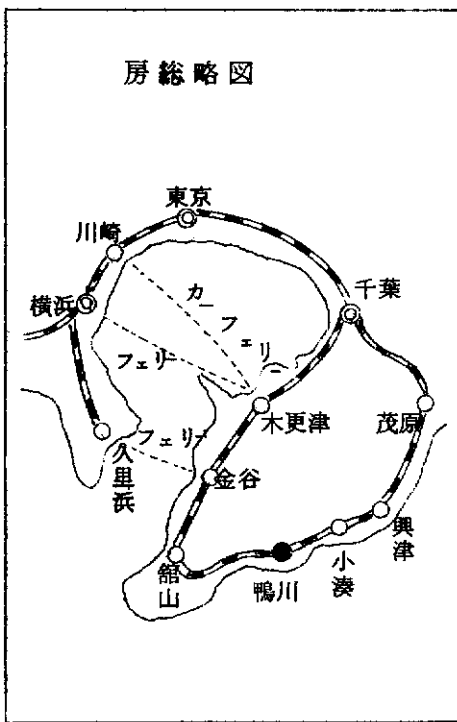
大会期日 一〇月一一・一二日の二日間

本年度の大会の開催地は、研究通信前号で予告しました通り、千葉県鴨川市の国民宿舎「望洋荘」で行うことに確定しました。ここは兩房総鴨川松原海岸に位置し、宿舎から渚までは股間の距離にあり、男性的な外洋の波濤のくだける潮騒に包まれ、芳醇な潮の香を満喫できる自然の環境にめぐまれたところです。例年のような主催者側の行き届いたお世話ができますかどうか甚だ不安ですが、自然の醍醐味をそえることでせめてもの責を果せていただきたいと思います。大会第一日目の一〇月一日は、全館借り切っており、宿泊にも余裕がありますので、多くの方々の参加をえて記念すべき第二〇回大会を意義あるものにしつたいと準備をすすめています。(なお、開催地の選定については、千葉県および中野芳彦会員からご協力をいただきました)。

交通ご案内

鴨川は、東京から急行で約二時間四、五〇分、横浜などからフェリーボートの便もあります。

房総略図



- (鉄道) 外房線(急行そと房号) 約二時五〇分、内房線(急行うち房号) 約二時四五分、特急(外・内房各線) 約二時間。
- (フェリーボート) 川崎—木更津(六〇分)、横浜—木更津(八五分)、久里浜—浜金谷(三〇分)、木更津から鴨川までは国鉄うち房線で九〇分、浜金谷から鴨川までは約七〇分です。
- 尚、時刻表は一〇月より改正(九月九日発売)になりますので、研究通信の次号に掲載する予定です。
- (駅から会場へ) 鴨川駅から会場「望洋荘」までは、徒歩で約一五分、バス(日東交通バス)・「行川(なめかわ)アイランド」行き、「誕生寺」行き(いずれも海岸廻り)で、「望洋荘前」下車。タクシーならば一区間一八〇円です。

宿泊のご案内

宿泊については、大会前日の一日から、大会第二日目の二日まで三泊分を、少々余裕をとって予約していただきますので利用下さい。尚、大変申し上げにくいことですが、宿泊予約を取消した場合には、一泊につき五〇〇〇円の解約料を徴収される制度になっていきますので、この点お含みおき下さい。

〔宿泊費〕 宿泊料 一〇〇〇円 (諸経費を含む)

朝食費 二〇〇円 昼食費 三〇〇円

夕食費 四五〇円

△懇親会費 六〇〇円 (但大会第一日目)

〔宿泊等連絡〕 同封の申込葉書で、九月二十五日 までにお知らせ下さい。尚、それ以後、変更される場合には、

柿崎京一・東京都中野区若宮二一五六―一二七 一

六五 TEL・〇三―三三〇―六七八四

までご連絡下さい。尚、会場の連絡は、

望洋荘・鴨川市広場八二〇 二一九六

TEL・〇四七〇九―二―二三一一

尚、余白を利用して、現地滞在に時間的余裕のある方のため、宿泊地附近の見学地のご案内をしますと、○誕生寺・鯛の浦 (バスで約三〇分・小湊)、○温室・ピニールハウス花卉園芸地帯 (江見)、○行川アイランド (興津)、○鴨川シーワールド (宿舍隣り)、また、大会終了後、東京に向う際の寄り道 (内房線) として、○館山の石仏群 (金谷下車)、○木更津・京葉工業地帯などがあります。

(柿崎・記)

ブラジルにおける

「日本人の村」調査からの音信

前山ジャンシーラ

Jandryra Maeyama

(旧姓 藤村)

(註) 村研年報第四集「ブラジルにおける日系村落社会の構造とその展開過程」(伊良湖幹での村研大会の報告をまとめた)の執筆者。東京教育大修士卒後、コネル大の人類学科博士課程在学。前山隆氏と結婚。一九七一年、現地調査のため母国(ブラジル)へ行き夫君の調査に協力中。以下中野卓会員あて私信より抄出。

(前略)この九月で、ブラジルに着いてから一年目を迎えます。月日のたつのは早いものです。海外(註、日本と北米)にあまり長く住みすぎたためか、最初の(註、南米への)なつかしさが、うれしさが過ぎると、今度は、ブラジル人のだらしなさ、電話・郵便・交通機関の不便さなどに憤慨し、逆に日本やイサカ(註、Ithaca コーネル大所在地)などが懐しくなったり、いろいろ cultural shock もありました。今はすっかり readapt して元気にやっています。主人の調査は上々。すっかり、ブラジルの生活のリズムに乗せられ、サンパウロ市日本人街の飲屋で、悪友達とチョイトいっばいやったり、サンカルロス日本人会の演芸会に当地の一世と二世問題をあつかった自作の藝居、トマトとコンピニーター。な

るものを上演したり、かんじんの調査の方はあまりはかどりませんが、前山は「人類学者が現地調査の中で芝居を書くことの意義」とか何とか云って、けっこうたのしくやっています。サンカルロス地方は有名な古コーヒー Fazenda 地帯で、一九二九、三〇年の経済恐慌でコーヒーファゼンダ (coffee fazenda) が没落した後も大土地は分割されずに現在に至り、昔のコーヒーファゼンダは牧場か砂糖キビ園に変わっています。ファゼンダ形態をそのまま引継いでいますので、したがって、無にひとしく、Fazendiro が借地農 (ファゼンダの一部を借りて農業耕作をしてゐる) としても、sharropopers と、日雇い労働者とに分れています。それに、古コーヒーファゼンダ主はコーヒーバニックと共に没落し、現在の牧場主、砂糖キビ園主などは多くはサンパウロ市あたりの資本家達です。一方、サンカルロス市は人口八万ぐらい、現在工業都市として発展しつつありますが、そのほとんどが、サンパウロ近郊の工業園から進出してきた大企業の分工場で、地元企業は少数です。コーヒー不況によってコーヒーの資本が都市産業へと流れていき、その地方の工業化発展をうながしたというプロセスは見られず、その点、他のサンパウロ州の地域と異なる面白い所だと思えます。この地方には、一九世紀の終りから、主にドイツ・イタリーなどの移民が導入され、日系移民もだいぶ入ったようですが、コロノから借地農、ファゼンダの分割による小土地所有、自作農といった経路をたどることがむずかしかったので、日系移民の大多数が、他の地域へ流れていった模様です。ドイツ移民・イタリー移民がどのような経路をたどったか、又、こ

れらの移民とサンカルロスの都市化とのかかわり、他方、小土地所有、自作農民がほとんど存在せず、ファゼンディオと借地農、ファゼンディオと sharropopers と、大きく二つに分解された。農村社会におけるコミュニティとは何か、私にとつては興味深い問題です。前山は全々別の観点から調査を進めています。残念ながら実際には、のんびりと道草ばかりくっている仕末です。目下、ブラジル文学、とくに農村と農民問題を扱った小説などに熱中しています。コーヒー前線と平行して進められる鉄道の設置につれて、土地の valorisation、未開地の所有、その影響などなど、四角張った社会学の教科書よりも、小説の方が面白いです。Coronelismo は、ブラジルの農村社会を勉強するには重要な問題だと思えます。ただ、余りにも興味が多すぎて、何を本当にやっているのか決心がつかかね、かんじんの、日本のむらゝが、だんだん遠くなりつつあります。むらゝを見失わないうちに、もう一度日本の農村も歩いてみたいものです。

「研究通信」総目次 (第1〜30号)

号数	発行年月	専務局	頁数
第1号	一九五三・四	東京教育大学社会学研究室	8
村落社会研究会の発足にあたり			
有賀喜左衛門			
発足に期待する			
島崎 稔			

総合的村落調査を

村落社会研究会会則

会員名簿

甲田 和衛

第2号 一九五三・四

東京教育大学社会学研究室

6

「研究通信」への期待

寸言

喜多野清一

中島龍太郎

山本 登

村落社会研究会への期待

第3号 一九五三・五

東京教育大学社会学研究室

8

東京大学文学部社会学研究室

走り百姓

宿題委員会報告を読み

研究促進のために

前回宿題委員会報告に関連して

武田 良三

大藪 寿一

川越 淳二

松原 治郎

第4号

東京大学社会学研究室

6

調査の標準化

年報について

宿題と我々の夏の調査計画について

地方からの希望

中野 卓

中野 芳彦

第5号

東京大学社会学研究室

6

村落社会研究会の年報及び宿題に関する拡大委員会報告

宿題のきめ方について、其他

名もなき神々

有賀喜左衛門

内藤 莞爾

第6号

東京教育大学社会学研究室

7

仙台大会を前にして

仙台大会予報

仙台大会共同討議のもち方について

拡大宿題委員会に出席して

会員の通信

喜多野清一

後藤 和夫

森住 伍郎

木原健太郎

第7号

東京大学文学部社会学研究室

10

宿題と大会に関する二つの意見

方法主義へ

第一回大会の印象と若干の希望

妄言多謝

村研仙台大会印象記

雑感

第一回村研大会を顧みて

帰台以後——第一回村研大会に寄す

研究室にもどって

内藤 莞爾

山本 登

内山 政照

大藪 寿一

皆川 勇一

原 宏

高倉 又二

川越 淳二

第8号

東京大学文学部社会学研究室

村研第一回大会出席所感

第一回集会後の感想

村落社会研究会に出席して

宿題と大会についての希望

漁村社会の研究

書簡

大山 彦一

島田 隆

斉藤 兵市

島崎 稔

山岡 栄市

生田 靖

第9号	一九五四・ 東京大学文学部社会学研究室	関 清秀
年報と宿題について	有賀喜左衛門	2
質問と感想		
第10号	一九五四・ 東京大学文学部社会学研究室	4
第11号	一九五四・ 東京大学文学部社会学研究室	4
再び年報と宿題について	有賀喜左衛門	
Neighborhood-Community Relation in Rural Society by John H Koib and Douglas G Marshall; Reseach Bulletin 154, 1944.	島崎 稔	
ひとつの紹介—ウイスコンシン大学農業試験所のおこなった調査研究について—	松原 治郎	
第12号	一九五四・九 東京大学文学部社会学研究室	4
第二回大会を前にして	有賀喜左衛門	
来年度の課題とその研究の方法について	福武 直	
村研の運営について	有賀喜左衛門	
待望の村研年報第一輯発刊近しノ		
第18号	東京大学文学部社会学研究室	4
農林省の行方部落調査について	内山 政照	
提案と註文	生田 清	
第14号	東京大学文学部社会学研究室	4
大会批判と提案	後藤 和夫	
通信	木下 彰	
共同課題について	有賀喜左衛門	
農村人口問題	大内 力	
次の共同課題について	中野 卓	
第15号	東京大学文学部社会学研究室	4
通信 I	生田 清	
通信 II	八木 佐市	
第16号	一九五五・八 東京大学文学部社会学研究室	6
新らしい発展へ	喜多野清一	
本年度課題への着眼点	中島龍太郎	
雑感 地方研究と現地協力者	竹内 利美	
思いつくままに	山岡 栄市	
旧版 人工雨	内藤 莞爾	
天草漁村と軋子役	中村 正夫	
第17号	一九五五・一〇 東京大学文学部社会学研究室	4
農村過剰人口の概念についてのノート	小池 基之	
村落社会の研究と社会学	井森 陸平	
発表を前にして	塚本 哲人	
事務局は「まわりもち」で	一事務局員	
村落社会研究会会則		
第18号	一九五五・一二 東北大学教育学部研究室	8
知識を全体のものに	有賀喜左衛門	
豊富な事実にもとづく厳正な検証を	R・P・P・ア	
充全の準備を	喜多野清一	

一つの提案——大会の運び方について

大阪大会以後

基礎概念への志向を

調査技術の検討

資料と分析と実践と

別集I

一九五六・四

東北大学教育学部研究室

福武 直

原 宏

矢木 明夫

西田 春彦

14

第三回共同討議記録

第19号

一九五六・五

東北大学教育学部研究室

共同研究前進のために

「村落構造の史的分析」と村落研究の課題

一つの提案

第20号

一九五六・一〇

東北大学教育学部研究室

本年度大会に望む

井森 陸平

矢木 明夫

山岡 栄市

川越 淳二

大内 力

山本 登

竹内 利美

有賀喜左衛門

大阪市大社会学研究室

第21号

本年度大会を顧みて

課題について

ブラジル調査行雑感

ヨーロッパ掃き寄せ

小池 基之

原 宏

坂本 哲人

有賀喜左衛門

11

第22号

一九五七・三

大阪市大社会学研究室

一つの展望

会員動向(アンケートから)

第23号

一九五七・五

大阪市大社会学研究室

「兼業化」の提案

偶感

通信

会員動向(其の二)

共同体研究と分業論

第24号

一九五七・八

大阪市大社会学研究室

通信

本年度大会の成功のために

二、三の提案

第25号

一九五七・一一

大阪市大社会学研究室

町村合併調査と共同体論の検討

対島の村——上県郡船越村緒方

第26号

一九五八・三

愛知大学社会学研究室内

昨年の大会と今年の大会

鹿兒島にて 村落共同体と政治権力

基本概念の検討

第27号

一九五八・六

愛知大学社会学研究室内

社会学における二、三の問題について

——一九五八年村研大会感想として——

一九五七年大会の総括討論会雑感

竹内 利美

有賀喜左衛門

川越 淳二

竹内 利美

山室 周平

中野 卓

福武 直

森岡 清美

鈴木 広

平山敏治郎

福武 直

松原 治郎

山岡 栄市

布施 鉄治

島田 隆

6

6

6

6

6

6

6

6

一つの視角

本年の大会を前に

第28号 一九五八・七 愛知大学社会学研究室

ある感想

大会開催地に関する会員の意見

第29号 一九五八・九 愛知大学社会学研究室

村落共同体——歴史学

私の聞きたい諸点

第六回大会プログラム

第30号 一九五八・一二 中央大学文学部社会学研究室

共同討議の感想——社会学の立場から——

今年の大会をかえりみて

大会雑感

鳴子から帰って

中島龍太郎

原 宏

島崎 稔

10

中村 吉治

喜多野清一

8

田原 音和

矢木 明夫

内藤 莞爾

原 宏

村落社会学研究・第八集の刊行について

村研年報第八集の編集につきましては、掲載予定原稿中、論文一研究動向（経済史学）一が、いずれも執筆者の都合により、七月下旬にいたって寄稿中止という事態にいたり、代りの執筆者を依頼する時間的余裕もなく、総頁二四六という、例年よりも頁数の少ない年報となりました。原稿を渡す時期がおくれたにもかかわらず、大

会前までに刊行できるよう特別のご配慮をいただきました瑞書房に厚く感謝したい。目次は左記のとおりです。（編集委・柿崎記）

村研年報 第八集 目次

○庄内一農村における地租改正とその前史的條件……田原音和

○共有金整理と村落構造の展開……白井宏明

○共通課題「村落社会学研究の方法」

1. 村落社会の一研究方法……中野 卓

2. 村落の領域……川本 彰

3. 村落研究の当面する二、三の問題……蓮見音彦

○第一八・一九回大会共同討論における論点をめぐって……安原 茂

○研究動向

1. 経済学における村落社会の研究……戒野真夫

2. 社会学における村落研究……吉沢四郎

3. 民俗学における研究動向……鳥越皓之

○編集後記
(価格は次号でお知らせします)

◇新入会員紹介◇

○斉藤典生 東北大学大学院

仙台市上樋一ノ四一二七 八岐社(〒九九八〇)

○西山 茂 東京教育大学大学院

埼玉県上福岡市中央一ノ七ノ一五(〒三三五六)

電話〇四九二一六一〇八三〇

◇ 会員の住所等変更 ◇

- 白井宏明 千葉市宮野木町一〇二六―二 (〒二八〇)
- (電)〇四七二―五一―八八五六
- 内藤莞爾 福岡市中央区平尾浄水町八九六 (住居表示変更)
- 中屋紀子 名寄女子短大 名寄市西一条南二丁目 (〒〇九六)
- 岩本由輝 (電)〇二三六一四―一六三三五

※ 左記会員の住所をご存知の方は事務局までご一報下さる※

- ※ 奥田和彦 北海道大学教育学部
- ※ 神田嘉延 北海道大学教育学部
- ※ 田中幹夫 東北大学教育学部
- ※ 根岸義夫 中央大学文学部
- ※ 加藤正泰 中央大学文学部
- ※ 松村安一 東京学芸大学教育学部
- ※ 川合隆男 慶応大学法学部
- ※ 佐藤喜一 東北大学大学院

村研年報第九集の原稿募集

通信八一号で詳しくお知らせしましたように、年報九集の原稿応募は大会(十月十一、二日)時に受け付けます。希望される方は、題目および要旨をそえて申出下さるようご用意願います。

会費納入についてのお願い

通信八一号で、会費納入のお願いをしましたところ、さっそく多くの方からお支払いいただきました。まだお納めいただいてない方には、振替用紙を同封しますのでよろしくお願います。納入の方法は左のいずれでも結構です。

○ 郵便振替 口座番号東京八〇二二七 村落社会研究会

○ 銀行払込 第一勧業銀行渋谷支店五〇五―八〇一 民秋 言

同 住友銀行渋谷支店六一―三四九 民秋 言

○ 現金書留 東京都小平市小川町一―八三〇 (〒一八七) 白梅学

園短期大学社会学研究室内 村落社会研究会事務局

事務局短信

通信82号をお届けします。

大会を目前にひかえて事務局はあわただしさをまわしています。共通課題、自由課題報告の応募者も出揃い、あとは九月十一日開催予定の運営委員会での最終的なプログラム決定をまつばかりです。

大会当番校図書館短大の紳崎会員も大張切り。「鴨川望洋荘は、女房や子どものいることを忘れさせる」ほどのすばらしいところとか。みなさまのお越しをお待ちしております。

通信八一号九頁、宮良高弘会員の共同研究の項、「日本民俗学会」とあるのは「日本民族学会」の誤りです。お詫びして訂正します。